

特集にあたって

日本大学研究所 徳橋泰明

今号の特集は、「脊椎脊髄疾患に対する分類・評価法」です。疾患の分類は疾患の病態を細分化、すなわち分別して治療法選択や治療指針の策定に利用し、良好な治療成績を獲得すること、さらに評価法はその結果を客観的に評価するという臨床医による臨床研究の原点です。

そのため、現在利用されている分類・評価法はいずれも多くの患者さんから学んだ先人たちの感性と情熱から生まれた臨床研究の結果でもあります。今回紹介する分類・評価法は、脊椎脊髄疾患において現在最も汎用されているものを選びました。そして、その領域の第一人者にご執筆をいただきました。中にはその分類・評価法の作成に直接携わった方もいますので、読んでいただくと作成の歴史的経緯や作成者の情熱が感じられるものと思います。

一方、これらの分類・評価法にエビデンスに基づいて作成されたものが非常に少ないこともわかります。言い方をかえると、個人の独断から生まれた分類も少なくありません。もちろん症例数の少ない疾患も少なくないので仕方がないことですが、症例数の積み重ねにより分類・評価法をさらに改定していく必要があります。現在、盛んに作成されているエビデンスに基づくことを理想とした診療ガイドラインにおいても、これらの分類・評価法の存在意義は非常に大きい。そのため、今後も分類・評価法の改定ないし新分類・新評価法の開発は続きます。私たちが時代に即した分類・評価法を知っておく必要があることはいうまでもありません。

「完璧な分類など存在しない」と論文中に永島英樹先生が述べているように、医療のもつ不確実性からこれは避けられない現実です。さらに完璧な分類を目指すとは非常に煩雑になり、簡単な分類しか使われない。このような現状を踏まえての意見ですが、それぞれの分類の意義と限界を十分に理解して臨床に生かすことが何よりも重要です。永島先生曰く、複数の分類を駆使して手術適応とその方法を検討すべきとまとめています。本特集も、各分類の意義と限界を理解して臨床応用していただきたいというのが最も重要な目的です。本誌は単なる脊椎脊髄疾患に対する分類・評価法の集積、辞典ではありません。いずれの項目もその目的に沿った各分野のエキスパートの執筆ですので、最初から最後までご熟読いただき、明日からの臨床に生かしていただければ幸いです。